

SD法による大学生の老人イメージ(日本と韓国の比較) — 日・台・韓大学生の比較調査(第2報)

○お茶の水女大家政 保坂久美子

お茶の水女大家政 袖井孝子

共立女短大家政 細江啓子

漢陽大家政 徐炳淑

実践家専家政 鄭淑子

目的：近年多くの社会において産業化・工業化が進展し、それに伴って「若さ」・「生産性」・「スピード」を重視する価値観が人々の間に浸透した。その結果、老人の持つ長年の経験と知識は役に立たなくなり、生産性の衰えによって彼らの社会的地位も低下したといわれている。こうした中で儒教道徳を意識の基礎とし、古くから敬老思想を持って老人と接してきた日本や韓国の若者は老人をどのように観ているのだろうか。本研究においては両国の大学生の老人イメージをとらえることにより、彼らの持つ老人観の共通点と相違点を明らかにし、それぞれの国の社会文化的要因がイメージに与える影響について考察する。

方法：調査の方法及び実施は第1報に同じ。老人イメージは、相反する形容詞対を尺度とする Semantic Differential 法(SD法)により測定した。尺度には50の形容詞対が含まれている。

対象者の基本的属性：第1報に同じであるが、ここでは日本と韓国の大学生のみを分析の対象とする。

結果：尺度の平均得点によってイメージをみると、大学生の持つ老人イメージは両国とも否定的なものに傾いているが、日本の方がややその傾向が強い。日本においては特に「非生産的」・「遅い」・「弱々しい」といったイメージが強く、効率主義的価値観が対象者により強く内面化されているのではないかと思われる。イメージを規定する要因については因子分析を行い因子ごとに検討したが、影響を与えている要因は因子により異なる。主な規定要因をあげると日本においては「老人や老人問題への関心」・「祖父母との会話」・「性別」などであり、韓国においては「祖父母との同居経験」・「老人や老人問題への関心」などである。